

## 医療リスク回避のための感受性教育訓練

荒木, 正見

<https://doi.org/10.15017/1397853>

---

出版情報：地域健康文化学論輯. 4, pp.26-46, 2011-03-31. 地域健康文化学会  
バージョン：  
権利関係：

## 医療リスク回避のための感受性教育訓練

荒木 正見

小論は医療現場における様々なリスクを回避することができる感受性を養うための教育訓練の一端を、オリジナルのエクササイズを交えて論じる。

なお、内容の性格上、筆者がかつて論文や著書で公表した理論や資料を駆使することを前以てお断りする。また、提起したオリジナルのエクササイズ類は、ぜひ活用していただきたいが、著作権は当学会と著者にあり、そのつど、出典としての当論文名を表記していただきたい。

さて、一口にリスクといっても、天災や人災のような災害から、病院内における医療ミス、医療事故、路上の交通事故や通り魔のような偶発的事故、戦場におけるさまざまな危険など、千差万別である。

例えばいま暫定的に、リスクを原因別に分類すれば次のようになる。

存在論的原因：宇宙や世界や人間が存在することに関する原因。→永遠の生命と個 **etc.**

自然的原因：自然現象に伴う原因。→天災 **etc.**

社会的要因：社会の在り方に伴う原因。→公害、薬害、医療水準、勤務環境、人間関係 **etc.**

身体的原因：身体の傾向性に伴う原因。→遺伝、病気、体質 **etc.**

人格的要因：人格の在り方に伴う原因。→発達、能力、考え方 **etc.**

それらの個々の対応にはそれぞれにふさわしいマニュアルも作られ、その技術も磨かれつつある。そして、リスク回避の方法の大枠は、リスクが起きないように世界や国家や組織が、リスク回避の環境を整えるところにあることはいままでもない。しかし、それでもさまざまなリスクが生じる。生じさせる現場には常に人間が存在する。リスクを発生させる側にもリスクの被害を受ける側にも存在する人間がいかにあればよいのか。小論はその角度からの考察である。

ところで、釜英介『「リスク感性」を磨く OJT』（日本看護協会出版会、2004年／2007年）によれば、「事故を起こしにくい看護師」として、①アバウトな看護師、②カラオケ好きな看護師、③地声の大きな看護師、と、一見逆ではないかと思われるような例が挙げられている（47～50頁）。しかしよく読むと、これらが意味しているのは適度なゆとりを持つことだと述べられていることがわかる。確かに、ゆとりがあることが、リスクという異和感に気付きやすいと思われるが、小論では、上記の例をより普遍化してリスク感受性を認識し、それに伴うオリジナルのエクササイズをいくつか提起する。

### 1. リスク回避のための感受性訓練の基本的要素

まず、リスクを回避するための感受性訓練の基本的要素について確認しておかねばならない。

高い感受性を持つことのできる真のゆとりを得るためには、統合的安定的な人格形成と自己環境づくりが必要だということから考察し始めなければならない。それらを小論では以下の4点に分けて述べる。

人格的安定  
倫理的生き方  
論理的思考  
総合的感受性

「人格的安定」に関しては、癒し **healing** の英語語源が **to make whole** であることを想起すればよいであろう（寺澤芳雄編集主幹『英語語源辞典』研究社、縮刷版 1999 年、635 頁）。自らのコンプレックスやバイアスに気づき、それを考慮しつつできるだけゆとりを持つような生き方をするのが普通の人間であるが、可能な限り自らの人格を発達させ安定的な生き方が自然にできるようになればそれが最もよいことはいうまでもない。我が国の医学教育の一環に組み込まれている「エリクソンの人格発達段階図式」はもとより、「TA 図式」などを参考にして自らを発達させることが望まれる。その場合、単にひとりで頑張るといふより、自らを健康に保つ総合的な生活形態を創ることが必要であるし、それには、セルフコントロールのみではなく、適当なスーパーバイズを得るようにすれば効率がよいであろう。

「倫理的生き方」に関しては、医療倫理は医療水準でもあることを自覚して、人類の生存、世界の生存を基礎にした思考と行動がとれるようにすることである。

「論理的思考」に関しては、起承転結、序論本論結論などの論理的思考方法に慣れることと、それを基本にしたコミュニケーション能力を持つことである。

「総合的感受性」に関しては、いわばこれまでのすべての総合でもある。すなわち、幅広い教養、自由な文化芸術活動、他者との交流などへの関心と参加とトレーニングを通して、豊かな人格と人間関係を持つことである。

以下、それらに関する説明とエクササイズを列記する。

## 2. エリクソンの人格発達図式に関して

下記はエリクソンの人格図式理解に繋がるオリジナルのエクササイズである。このように自己理解をしておいて、エリクソンの理論に繋がると自分のこととして理解しやすい。

### 自分を知るためのエクササイズ 1

5段階のどこかに○をつけてください。

①

a. あなたはこの世界に生まれてよかったと思いますか。

とてもよかった    ややよかった    普通    あまりよくない    全くよくない

b. あなたは自分が好きですか。

大好き    やや好き    普通    あまり好きではない    嫌い

c. あなたは家族や友人に信頼されていると思いますか。

とても思う    やや思う    普通    あまり思わない    全く思わない

②

d. あなたは規則をきちんと守りますか。

よく守る    やや守る    普通    あまり守らない    全く守らない

e. あなたはなんでも自分でするほうだと思いますか。

とても思う    やや思う    普通    あまり思わない    全く思わない

f. あなたは自分を頑固だと思いますか。

とても思う    やや思う    普通    あまり思わない    全く思わない

③

g. あなたは他人に対して厳しくあたるほうだと思いますか。

とても思う    やや思う    普通    あまり思わない    全く思わない

h. あなたは負けん気が強いと思いますか。

とても思う    やや思う    普通    あまり思わない    全く思わない

i.あなたは世界の中心は自分だと思えますか。

とても思う やや思う 普通 あまり思わない 全く思わない

④

j.あなたは他人の評価が気になりますか。

とても思う やや思う 普通 あまり思わない 全く思わない

k.あなたは集団の目的より自分の目的を重視しますか。

とても重視する やや重視する 普通 あまり重視しない 全く重視しない

l.あなたは自分が努力型だと思えますか。

とても思う やや思う 普通 あまり思わない 全く思わない

⑤

m.あなたは責任感が強い方だと思えますか。

とても思う やや思う 普通 あまり思わない 全く思わない

n.あなたには自分の確固たる未来の目標がありますか。

強くある やや強くある 普通 あまりない 全くない

o.あなたは自分で何でも実践するほうだと思えますか。

とても思う やや思う 普通 あまり思わない 全く思わない

⑥

p.あなたは他人の意見に耳を傾けるほうだと思えますか。

とても思う やや思う 普通 あまり思わない 全く思わない

q.あなたは他人とのコミュニケーションがうまくいっていると思えますか。

とても思う やや思う 普通 あまり思わない 全く思わない

r.あなたは独りでがんばってみたいと思うことがありますか。

とても思う やや思う 普通 あまり思わない 全く思わない

⑦

s. あなたは周囲の方々に信頼されていると思えますか。

とても思う やや思う 普通 あまり思わない 全く思わない

t.あなたは人生の協力者を得たいと思いますか。

とても思う やや思う 普通 あまり思わない 全く思わない

u.あなたは他人の良いところを伸ばすために力を注ぎたいと思いますか。

とても思う やや思う 普通 あまり思わない 全く思わない

⑧

v.あなたは自分の人生すべてを受容できると思いますか。

とても思う やや思う 普通 あまり思わない 全く思わない

w.あなたは自分の人生に起こったことのすべてを子孫に伝えたいと思いますか。

とても思う やや思う 普通 あまり思わない 全く思わない

x.あなたは死にかたを考えて生きていますか。

とても思う やや思う 普通 あまり思わない 全く思わない

全体のバランスを考えると、「やや」「普通」あたりが標準。

数値化することは不可能。あくまで、その時々のご自己の目安。

### 3. E.H.エリクソンの人格発達論 (Erik Homburger Erikson.1902-1994)

前項で提起した「自分を知るためのエクササイズ 1」は、E.H.エリクソンの人格発達論を意識したものである。ここで確認しておきたいのは、これは量的目安ではなくあくまで、質的目安だということである。

従って、末尾に述べているように、[全体のバランスを考えると、「やや」「普通」あたりが標準。][数値化することは不可能。あくまで、その時々のご自己の目安。]と、一見緩やかな目安に見える。まさにそのように理解すればよい。

ここで、E.H.エリクソンの人格発達論を概説するが、その各発達段階が、エクササイズの①～⑧に対応している。

なお、以下の諸説明は筆者の旧論文、旧著などと重複するが、説明の必要上やむを得ないこととしてご理解頂きたい。

まず、エリクソンの人格発達論の骨格となる基本的前提を述べる。

- ・ 人格は生涯を通して発達する。(人格概念から言えば個体が物質的に死んでからも発達する。) その発達過程はいわば「予定表(ground plan)」のように決まっていて、これを「ライフサイクル(life cycle)」と名づける。

- ・ ライフサイクルは8段階の心理・社会的発達段階に分けられ、発達は段階を追って進行するが、発達の各段階では得られるべき課題があり、それは各段階において対立的要因の統合として獲得される。それが解決されなければ危機として現れるが、その危機を克服することで、その時期特有の心理的能力を獲得する。＝漸成原理(epigenetic principle)。
- ・ ある段階で得られるべき課題が得られなかったら、それは危機的課題としてその後の人生に持ち越される。＝危機説

次にそのライフサイクル、すなわち人格発達の諸段階についての表を提起する。

表は2種類あるがいずれも同様のものである。

しかし、表1では特に最後の項目、「得るべき事柄」に後掲書のオリジナリティが示され、それは理解する上で極めて有効と考えられるため、特に掲げる。

また、表2は詳細に説明されているものを掲げる。

表1 エリクソンのライフサイクル

(E.H.Erikson, The Life Cycle Completed, Norton, 1982/1998, p 56-57, Chart2) = 訳語はほぼ、村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル、その完結』(みすず書房、1989/1999)に従う。各段階最後の[]は、岡堂哲雄ほか『患者ケアの臨床心理 人間発達学的アプローチ』(医学書院、1978/2000)を参考にした。

段階	得るべきバランスの両極		得るべき事柄
⑧ 老年期	統合	対 絶望, 嫌悪	[英知]
⑦ 成人期	生殖性	対 停滞	[世話]
⑥ 前成人期	親密	対 孤立	[愛]
⑤ 青年期	同一性	対 同一性混乱	[忠誠]
④ 学童期	勤勉	対 劣等感	[適格]
③ 遊戯期	自主性	対 罪悪感	[目的]
② 幼児期初期	自律性	対 恥, 疑惑	[意志]
① 乳児期	基本的信頼	対 基本的不信	[希望]

エリクソンは、人間を、個人としては精神—身体の統合として捉え、また社会人としては、対人関係的な存在として、また、社会—文化的な存在として、さらには、歴史的な多次元の存在として捉えている。このようにして、人格をこれらすべての統合の主体と考え、個人の人格的発達は、周囲の環境との相互作用によって起こるものとした。

特に、高齢期においては、個体としての人生の完成期であり、また、転換期でもあるとして、下記の表2でも示されるように、「人生でであったすべての人と事柄が自分のただ一度の人生にとってかけがえのないものであったとして受容し、そのすべての人生と受容したこととを子孫に伝える。」という重要な時期であるとする。

表2はやはりエリクソンによる8期の生活周期を示したものである。そして、各発達段階の重要な対人関係者とその段階において獲得すべき危機を乗り越えるためのバランスおよびその時期に特徴的なコミュニケーションを示している。

各段階の課題は個人と個人を取り巻く事柄や人や環境との相互作用で達成されていくが、完璧に達成されることはほとんど無い。達成されなかった課題は次の段階に持ち越されていく。しかし、多くの場合その後の段階でその課題異なった形で修復されていく。たとえば乳児期での信頼関係が十分に達成されない場合には、大人になっても他人が信頼できない、孤立するなどのさまざまな問題が起こる。たしかにそれらすべてを解決することは困難ではあるが、以降の段階で課題を修復する機会が得られれば信頼関係の回復が望めるといえる。

表2 エリクソンの生活周期(人格発達図式)

前田重治『図説 臨床精神分析学』誠信書房、1985年、113頁)の表を改変

発達段階	対人関係	危機の両極と得べき心理・社会的バランス	① ふさわしい心の成長課題 ② 危機的な状態
① 乳児期 (～1歳)	母性	信頼感⇔不信感	① 自己と世界に対する信頼性。他人を信頼する力。希望を持てる。 ② 孤立。自己否定。依存。まわりに興味や関心がもてない。引きこもる。周りが信用できない。環境に対する働きかけが出来ない。全て否定しどうせ何を言っても無駄だと思う。全て依存して自分から動かない。
② 早期幼児期 (1～2歳)	母性・父性	自律性⇔恥・疑惑	① 自律性。 ② ルールを守れない。欲求や衝動をコントロールできない。規則破り。自分の枠や価値観や考え方にたたくにこだわる。無恥。
③ 幼児期 (2～6歳)	家族・友人	積極性⇔罪悪感	① 社会性。第三者に配慮する力。 ② 自己中心的。わがまま。競争心や支配欲求が強い。自分のことばかり考えて集団本来の目的を見失う。
④ 学童期 (6～12歳)	教師・友人	生産性⇔劣等感	① 協調性・耐性。集団の中で協調し自分の役割をこなす力。生産する喜び。自分なりのレベル意識。 ② 集団の中で協調できない。他人の評価ばかり気にする。こつこつと努力を重ねることが出来ない。



⑤	青年期 (12～20 歳)	父・母 教師・友人	自我同一性⇔同一性 拡散	① 自己責任能力。独立性。 責任を持って首尾一貫した行動 を取る力。 ② 行動に首尾一貫性がない 自分 の言動に責任を持たない。将来 像を描けない
⑥	成人前期 (20 歳代)	配偶者 友人	親密さ⇔孤立	① 自他の尊重。 相手の意見を受容できる。 互いに大切にし、共に支えあう 力 ② 配偶者や友人との間に成熟して 自立した関係がもてない
⑦	成人期 (30 歳代)	配偶者・ 友人・子	生産性⇔沈滞	① 信頼関係の形成。 愛情や関心を持って相手を育み 信頼関係を形成する力。 相手の成長を信頼し、良いとこ ろを認めて伸ばすことができ る。 人生のテーマを発展的に追求で きる。 ② 子供、友人、患者、部下、同僚、 配偶者、仕事のテーマなどを対 象の本質に沿って伸ばすことが できない。対象を自分の思い通 りにしたがる。
⑧	老年期	人類	統合性⇔絶望	① 人生と人生で出会ったすべての 人と事柄を受容する。 ミスや挫折の意味を見出し成長 のばねにして肯定的に受容でき る。人生で出会ったすべての事 柄とその受容について子孫に伝 えることができる。自分の人生 でやり遂げてきたテーマを語る ことができる。 ② 自分の人生を否定し、絶望する。 周囲と人生を恨む。

#### 4. TA（交流分析）における人格図式

TA（交流分析）で用いられる人格図式は人格完成のモデルとして理解しやすいものである。TAの全体像はこのような目標を以て、それに至るべくトレーニングすることまでを含むが、この目安だけでも日常の目標として十分な意義を有するといえる。

表2：TA（交流分析）における人格図式（杉田峰康『交流分析のすすめ』日本文化科学社、1990年に基づいて改変）

要因	内容	発達した性格	未発達の性格
CP (Critical Parent)	父親的・批評的親性	原理・原則に基づく厳格	個人的好みのあら探し
NP (Nurturing Parent)	母親的・養育的親性	本人にふさわしく養育	過保護・過干渉・疎外
A (Adult)	大人性	情報収集・論理的現実性	空虚な合理性
FC (Free Child)	自由な子ども性	他人も愉快にする自発性	他罰・傍若無人
AC (Adapted Child)	順応した子ども性	他人も愉快にする素直さ	自罰・内向・引きこもり

人はこの表の左端に示された5つの要因すべてを有し、そのすべてにおいて発達した性格をもてば成熟し、円満な人格であるといえる。もちろん現実のさまざまな場面で我々は5つの要因のどれかを表に出して行動する。しかしそれでも、それぞれの発達した性格を表現することが良好なコミュニケーションと人間関係をもたらすのである。

#### 5. 医療倫理の基礎

ここでは人格的安定をもたらす知恵として知っておくべき医療倫理の基礎概念を述べ、医療現場で常に反復しておかねばならない根源的な考え方をもとに再確認する。

##### ① 倫理学の根底

倫理学とは価値および生存の学である。本来、広義の哲学に含まれ、哲学の実践的領域を意味したように、根底には存在論や認識論を横たわることを前提に語らないと、単なる相対的な議論に陥ってしまう。

そのように考えたとき、論理的に矛盾しない柱になる考え方は「人類の生存」であるといえる。人類の生存を否定する考え方をもちて議論することは矛盾である。ここから導かれる倫理学の一般的前提の一部は以下の通りである。

「生存のためには無限で多様な知識が必要である。」（知識による危機管理原則）

無知に付け込まれれば、無知な集団は絶滅する。これに対して人類は情報という武器を持つ。仮にたった一人しか知らなかったことでも、それが人類を救う知恵であれば、すぐさま全人類に知らせて人類を守ることが出来る。

「同時に、総ての知識の位置関係、特に実行すべきか、否かについての知恵が重要である。」（生存の倫理原則）

先のことからいえば、人類の生存にとって重要な情報のひとつに、人を殺す仕方についての知識がある。それを知っておかなければ、危険が迫ったことを察知できない。しかし、その知識は自ら実行してはならない。実行すべき知識かそうでないかを知ることが、特に重要である。これは古来、知恵と呼ばれてきたものである。

## ② 医療倫理の諸問題（生命倫理の根本的理解）

以上の知識と知恵の持ちようを医療倫理の根底に置き、現実的に考えれば次のように述べる事が出来る。

まず、上のことから、個体の生命を可能な限り長く保つことが大前提である。医療従事者は、何よりもまずそのことを目的として携わっている。

他方、現実的には、社会的・歴史的相対性の枠組みを考慮せざるを得ない。具体的にはその時代、その地域の法が最優先となる。法は、相対的な社会情勢、経済状況、伝統的な考え方、時にはイデオロギーや宗教によって決まるものである。その場合、法と個人的理想やヒューマニズムは、対立する可能性もある。そのような個人的理想やヒューマニズムが普遍的であればあるほど、現実的には心の痛みを抱きつつ法に従わざるを得ないことも生じる。この場合は一般的には、法に従った上で、ヒューマニズムを生かす方法を考えることになる。

医療行為の主体は自分自身であることはいうまでもないが、その自分がどのような立場でものを考える傾向があるのか。倫理的な立場では特にそのことを再確認しておかねばならない。

## ③ 医療倫理の現実的対処 — 「燃え尽き」と人格発達と倫理

これまで述べてきた人格発達や倫理が、医療現場の問題解決にどのように関わるかを、「燃え尽き」を例にして箇条書きにして述べる。

a. 自らの発達に向けた楽天性を持つ。ゆとりある創造的な趣味を持ち人格的成熟を目標とする。

なにか乗り越えなければならない問題があれば、努力すべきことは当然だが、やみくもな努力はエネルギーの浪費に繋がるばかりである。退行と再統合のダイナミズムを有効に生かすことが求められる。ここで、楽天性とは、再統合を目的としてエネルギー消費を少なくするために、合理的に生きる知恵をも持たなければならないということである。その知恵の中で有効なものひとつが、先に述べた人格発達論である。また、創造的趣味は、本能的に選んだみずからの人格発達を獲得する方法である。

b. 生死観や症状などに対する理解。全体像を系統的に理解する構造的知識を持つ。

合理的理解は、肩の荷を降ろしエネルギーの浪費を防ぐ。そのうち症状の理解が重要であることについては常識であるが、近年、特に求められるのが生死観もしくは死生観についての理解である。個体の生を最大限保持することを目的とする医療従事者にとって、患者の死は、悼みの対象であるとともに自らにとっての屈辱でもあると考えがちである。ホスピス病棟における医療従事者の燃え尽き現象が多いのもこのことを意味している。

これに対して、哲学的前提に基づいてアドバイスすることは、「主語を個体から全体に替えてみては。」というものである。個体が主語である場合には、死は絶対的であり、個体の死は個体の消滅を意味する。しかし、実際に個体はその死をもって我々の前から姿を消すわけではない。物質的に個体としての統合を失いはするが、我々は少なくとも記憶という形で統合的な個体を保存している。また、個体の統合的物質は統合性を失うだけであって、物質そのものが無くなるわけではない。これらを論理的に解釈するのにふさわしいのが、主語の変換という方法である。個体は唯一の絶対的、無限な存在から生まれ、その一側面を担っている。その絶対的存在を主語にすれば、生命は唯一で絶対的存在となる。絶対的存在において運動があり、生々流転がある限り、大いなる生命はひとつの絶対的存在である。個体の一生は、その全体にとっては写真のネガのように永遠に刻み込まれている。個体は自己表現をすることで全体を豊かにする。その意味で、個体もまた永遠である。

このことから、先に述べたエリクソンの人格発達論の最終段階、老年期についてエリクソンがまとめていることが、深い意味を持っていることに気づく。再び述べれば、老年期の課題とは、「人生において出会ったすべての人やすべての事柄が、自分のただ一度の人生にとってかけがえのないものだったとして受容し、そしてそのことを子孫に伝えること。」であった。これが先に述べた意味での個体の永遠の存在を背景にしていることであることはいうまでもない。

c. 個性としての自己自身を伸ばし、スーパーバイザーを持ち、確かな知恵に基づいて行動する。

個性とは、単に人と異なっていることではない。本来、個性とは、普遍性と特殊性との合一を意味する。確固たる普遍性のトレーニングの上に、その普遍性を自分なりに工夫して構成しなおすところに真の個性がある。論理的理解力と表現力の訓練はその一端である。そのようなトレーニングを積みつつ自己実現、すなわち本来の自分を求め、自分の本質的な生き方を模索することになるが、やはり参考にすべきスーパーバイザーが必要である。特に医療従事者は、自分の経験の範囲を超えた患者と出会う可能性が高い。そのような患者とのコミュニケーションは、単独の知識では無理だということを周知しておかなければならない。そのような意味を受けて、時には逃げる勇気をもたなければならない。これは決して責任を放棄しろというわけではない。自分に出来ること出来ないことのわきまを厳正に行って、真に有効な治療を行える環境を提供しなければならないという意味である。そして繰り返すが、ふさわしいスーパーバイザーを常に持つことである。

d. ハラスメント

ハラスメントとは「いやな思いを与えること」という人権侵害である。法的には、給与、昇進、就職、福利厚生、教育、発達などの様々な側面からハラスメントを判断する。医療現場では医療行為や患者の治癒の妨げになる「いやなこと」がそれに当たる。今日、パターナリズムからチーム医療へという流れが常識になっているがこれに背く行為などもハラスメントに当たる。但し、教育的配慮、治療目的において行われるいやなことはそれに当たらない。むしろ教育すべき立場のものが教育を放棄することも教育を受ける権利に抵触するハラスメントに当たる。

## 6. ステルトテスト

これは筆者が創案したオリジナルのテストである。

自分を知るためのエクササイズ 2
------------------

次の括弧の中に入れる言葉を3つ以上考えてください。

- ① ここにゴミを捨てると ( ) になります。
- ② ここに ( ) を捨てると ( ) になります。  
※ ( ) は口頭で伝えます。

上記②の ( ) は、始め「罪」を入れる。

次に「楽」を入れる。

「楽」に至って、このテストは本当はこの「楽」になるために捨てたいものを問うものだったと気づくことになる。では、それまでの2問は何だったかと言えば、被験者の防衛を取るための仕掛けであった。始めから捨てると「楽」になるものを問うと、なかなか本音が出ないが、このテストの流れで問うと、意外とすらすらと本音で答えて頂けるようである。

## 7. 論理的訓練

コミュニケーションにとって必要な論理的訓練として最も古典的でありかつ重要なものは、「起承転結」や、「序破急」に沿って考え、表現することである。これらの諸形式は文学や音楽から来た概念ではあるが、事務的な論述も、やはり「起承転結」や「序破急」から発展させて考えると分かりやすい。実は事務文書やカルテにもこのような組立てが前提されている。それは、全体的なフォーマットとともに、項目執筆の1項目ごとに本来配慮されなければならないものである。厳密正確な伝達による危機管理の根本がこの論理的訓練である。

近年、アメリカ流の「序論(introduction)本論(main subject・main issue)結論(conclusion)」型が増えているが(吉田健正『大学生と大学院生のためのレポート・論文の書き方』ナカニシヤ出版、1997年/2000年)、これもわが国の伝統的視点の側から考えれば、基本的には序破急型の発展型と考え得る。

「起承転結型」は、文学作品のテーマを考察する場合のように、ひとつの対象をじっくり吟味して統合的な結論を導く場合に有効な形式である。(説明は保坂弘司『レポート・小論文・卒論の書き方』講談社学術文庫、1978年／2001年、54頁による。)

- 起(前提) —前置き
- 承(発展) —説きひろげ
- 転(転換) —角度を変えての説きひろげ
- 結(結論) —主張して結ぶ

それら各章の意味と繋ぎ方を生かした論理的文章の組み立ての一例は以下の通りである。なお、これはあくまでひとつの例であり、実際には、簡潔にしたり、豊かな感性や人間性を滲ませたり、正確な論理を迫るべきより厳密な手法、例えば数量的資料などを導入したりするなどの工夫が求められる。

起承転結完全型(短いものは②③が統合される。)

- ① タイトル：表題。
- ② 序文：これからとりかかるテーマ、目的、資料など簡潔に。大きな論文の場合には、すでに結論を簡潔に述べておく場合もある。「このレポートは、○のテーマを読み取ることを目的とし、テキスト○を分析する。その場合、○の方法、資料を用いる。」「結論を前もって述べておけば・・・」などの言葉を有効に用いて構成する。
- ③ 第一章：起(前提)にあたる。レポートの目的・方法・資料の紹介。序と兼ねてもよい。やはり、簡単に結論を述べておく。
- ④ 第二章：承(発展)にあたる。テキスト、資料に迫って、書き写したり、まとめたりしながら、自分なりに結論をまとめる。当面は焦点を絞って、結論を導く。「先に述べた方法に従って考えれば次のように述べることができる。」「テーマは次のようにまとめることができる。」など。
- ⑤ 第三章：転(転換)にあたる。参考資料や、違う角度からの考察、異論などを参考に、承の結論を強化する。特に、二重否定的な考察があれば厚みが増す。ここでは多彩な資料を用いて広く深く考察することになるが、それぞれの考察の位置関係を明晰に述べるのが求められる。「先の結論の内容と比較すると、次の意味で正しいことがわかる。」など。
- ⑥ 第四章：結(結論)にあたる。承で得た結論を、転で強化した経緯を簡潔に述べて、得られた結論を精確に記す。なお、最後には残された問題を述べて終わると良いが、この論文から得られた直接的な問題を最優先に記す。あまりかけ離れたものや、単なる感想にしないこと。「これまでの考察の流れをまとめると次のように示される。」「この考察で残された問題は次のように示される。」など。

[序破急]

「序破急」という言い方は、ほかには「首胴尾」「前提発展結論」「序論本論結論」などとも言われ、特徴は「序」に結論を述べておき、「破」部分に、「承」と「転」を混在させる。

西欧人の発想ではこれが主流であるが、日本では「序」でしっかり結論を述べさえすれば「起承転結」のほうが理解されやすいようである。

#### [叙の問題]

いずれの形式でも、各部分に章を増やしたい場合に、自由に増やすことができるが、それを「叙」と呼ぶ。「叙」はどこにつけてもよいが、特に、「転」や「破」ではさまざまな角度からの考察が重層的かつ多様に展開するだけに、叙（補述）を付けることが多い。

### 8. 文章表現の留意点と論述のマナー

文章表現を行う際の、解りやすく表現するための留意点や、マナーの例は以下の通りである。正確な医療コミュニケーションにとっては欠くことのできないスキルである。

何かを伝える場合には、相手を重んじ、先達の業績を大切に、誠実に伝える心構えが必要である。また、自分の言いたいことを正確に伝えようとする情熱と、それを遂行するための忍耐が要求される。

#### ① ねじれ文を作らない。

ねじれ文とは、主語と述語が形式的にうまく対応していない文をいう。例えば、「私の未来像は、立派な医師になって、病人を助けたい。」という文章はねじれ文である。この文の主語は「私の未来像は」であり、述語は「助けたい」となり、主語と述語がうまく対応していない。他にも、能動と受動がねじれる場合がある。例えば、「この本では、〇と述べている。」という場合である。この例文の場合、やはり「述べられている。」と受動にするほうが自然であろう。このようなねじれ文を作らないために、小笠原喜康『大学生のためのレポート・論文術』（講談社現代新書、2002年）では、「よい文の三原則」として、「短文・単文にせよ」「修飾語を多用しない」「主語・述語関係を明確に」と、主述構造に配慮し、できるだけ簡潔に述べるように心がけるべきことが述べられている（197-201頁）。

#### ② 資料は公開する

資料に関しては、読者がその原典に戻れるまで紹介する。書籍であれば発行所、出版年、頁まで書き、インターネットではサイトのアドレスとそれを検索した年月日までを記さなければならない。

#### ③ 孫引きをせず、引用モラルを守る。

孫引きと言うのは、間接的な情報であるにも拘らず、直接的な情報のふりをすることで、例えばつぎのような場合である。A氏の著書に「B氏は〇と述べた。」と述べられているのを引用して、A氏のことには一切触れずに「B氏は〇と述べた。」と記す場合である。これは、他人の業績を盗むという犯罪行為であるばかりか、真偽については実に危険なことをしていることになる。なぜなら、A氏の記述の検証なしにそのまま記し

ているからである。この場合は自分で直接B氏の情報を収集するか、「A氏の記述では」と断らなければならない。このように、情報の引用は正々堂々で行わなければならない。

④ 引用や例に語らせて終わりとしなさい。

リアリティを持たせるため、適宜引用したり例を用いたりすることは技法として重要であるが、前項と同様、引用や例示する場合には、自分としてはそれがどのような意図によるものかを述べるつもりで、自分の言葉に置き換えてまとめなおすのが原則である。長い文章を引用する場合は特にこのことが必要だし、資料として掲載する場合を除いては、その意味でもおおむね400字以上の連続引用は避けるべきである。効果を狙って一語のみを引用する場合もあるが、この場合もどのような意図なのかを示すほうが親切な報告だと言える。

⑤ 私見は論証した上で述べ、感想めいた記述は避ける。

論述は本来自分の意見を述べるものだから、私見が表現される場面が生じるのは当然ではあるが、何の論拠もなく思い付きを述べるのは適切ではない。論理的な因果性に基づいて組み立てることを自覚して、常に論証を心がけなければならない。

## 9. 論理的訓練エクササイズ

論理的訓練エクササイズ 1
---------------

「自分が気になる医療上の問題点を述べよ。」

起

承

転

結

以上のように起承転結を明確に意識して自分のテーマを考えて頂く。そのうえで、次の集団によるエクササイズへと繋ぐ。



## 10. 論理的訓練エクササイズの完結

### 論理的訓練エクササイズ 2

6名程度のグループに分かれてじゃんけんで司会・記録係・発表係を決め、話し合いながら、以下の課題を行って下さい。

「自分が気になる医療現場での問題点の解決法を述べよ。」

起

承

転

結

これで当面の目的を達したと言える。試行段階では、この最終のエクササイズに至って、自らが成長したという実感を感じて頂いたことはいままでの間でもないが、それは自らを再認識したという意味である。なお、この最後のエクササイズが実り豊かになる場合とは、年齢が高く医療現場で長年苦勞してきたメンバーが含まれている場合が顕著である。

さて、以下は付記である。

まず、危機管理の具体例としてインシデントレポートとアクシデントレポートの書き方に伴う小論で述べてきた内容の位置づけを確認する。

## 11. 危機管理の具体例：インシデントレポートとアクシデントレポート

医療現場におけるさまざまな危機管理における一例として、インシデントレポートやアクシデントレポートの効率的な書き方を挙げてみると、これまでの人格発達や、医療倫理の根本、論理的な素養などのような側面からのアプローチが有効であることがわかる。

まずそれらの概念の例として都立病院の申し合わせ事項を参考にする。

(<http://www.byouin.metro.tokyo.jp-hokoku-anken-documents-jikoyobo0101.pdf>)

[インシデント・アクシデントレポート様式の統一]=最終検索 2011.6.09)

それによれば、インシデントとは、患者に傷害を及ぼすことはなかったが、日常診療の現場等でヒヤリとしたりハッとした（りした＝荒木補）事象とする、とされ、アクシデントは、医療従事者が予想しなかった悪い結果が患者に起こった事象とする、とされている。

各レポートはこのような前提のもとに各項目が設定され、機械的に記入していくようになっているが、二つのレポートのうち、「速報」における「関係者の自由意見欄」や、「第2報」における文章記述欄「発生時の状況」「その後の対応」「発生の要因」「防止策」「所属長の指導」などの自由記述欄を分かりやすくすることこそ危機管理の基本である。

筆者の私見によれば自由記述には次の二種類があると考えられる。

#### 二種類の自由記述

##### ① 対応型

箇条書きになっている個々の項目に逐一对応させて、より詳しく述べる。

各項目に関してはより正確になるが、それ以外の要因や記述者が強く感じたことなどを見落とす危惧が生じる。

##### ② 独立型

箇条書きになっている項目とは独立に白紙の状態から作文する。記述者の問題意識が明確になるが、表現能力に多くを依存する。

そして、①②のいずれも、

a.倫理的に普遍的な知識を持つ。すなわち、法—社会通念—倫理という系列で考えれば、法は現実的には最も明確に態度を決定し正否を表現するが、時代によって変化する。これに対して、倫理は、必ずしも法には縛られないが時代の変化によって左右されない正義を表現する。このような知恵を背景にして記述する。

b.自分がどのようなバイアス（傾向性）を持っているかを知り、反省的に考えて記述する。

c.レトリックの形式＝起承転結や序論本論結論をわきまえていればより合理的に記述することが出来る。

d.豊かな知識と知恵と感性に基づいたヒューマンかつ前向きな生き方を背景とする。

(cf.芸術、学問、読書、人間と世界の本質に触れる趣味。)

これを先の「論理的訓練エクササイズ2」と対比させて考えることもできる。以下、起承転結に沿って対比的に述べる。

論理的訓練エクササイズ：「自分が気になる医療上の問題点を述べよ。」
-----------------------------------

起

～が問題点と言える。このことを～（勤務先での事例、新聞記事、etc.）に基づいて述べる。

（以下括弧は「第2報」における各項目との対応。ここでは、起こったトラブルを簡潔に記す。）

承

問題点の内容。問題の流れ。問題点の詳しい説明。etc.

このように～が問題点と言える。

(前記「発生時の状況」「その後の対応」。)

転

問題点に関して別の角度からの考察。

問題点にならない可能性。

問題点の原因。→問題解決の可能性と方向性。

このように問題点はより詳細に理解されたことになる。

(前記「発生の要因」「防止策」。)

結

これまでの考察の経緯と、問題点のまとめ。

解決の方向性など今後の課題。

考察が足りなかった点の記録。

(前記「所属長の指導」。)

このように対比させると、一見ランダムに示されている各項目が、起承転結と対応していることが分かるし、それゆえに起承転結を記すつもりになれば明確に整理され伝達力を増すことになる。

次に、自らを再認識するためのエクササイズの他のオリジナル例を、いくつか紹介しておく。教育場面に応じてこれらを活用することを期待する。

12. 自分を知るためのエクササイズ：高校時代に戻ってしてみたいこと

自分を知るためのエクササイズ 3：高校時代に戻ってしてみたいこと

高校時代に戻ってしてみたいことは何ですか。

おおいにしたいことには○を、ややしたいことには△をつけてください。

括弧には具体的に文字を入れてください。いずれも複数可です。

- 勉強
- 資格取得 ( )
- 友達作り・友情
- 恋愛
- 親孝行
- 部活・サークル活動 ( )
- 体育祭
- 文化祭
- 読書 (分野 )
- 健康作り
- スポーツ ( )
- 語学 ( )
- 遊び
- おしゃれ
- 就職活動
- アルバイト
- 国内旅行 (場所 )
- 海外旅行 (場所 )
- 趣味 ( )
- その他 ( )

↑ さて、どんな高校生が浮かんできますか？

その高校生は魅力的ですか？

これは、実は現在の夢を探るテストである。高校時代を経験していない人には「16、17歳にもどって」と尋ねてもよい。いうまでもなく、人生で最も多感な時期であるが、何でもできそうなこのころにしてみたいことこそ、今後実現してみたいことである。指導者はそのつもりで、今後に向けてアドバイスをすることを期待する。

13. 自分を知るためのエクササイズ：ゴキブリテスト A

自分を知るためのエクササイズ 4：ゴキブリテスト A

突然ゴキブリが現れました。あなたは、どのような行動をとりますか。○をつけて下さい。

- ① 新聞紙を丸めて叩き潰す。
- ② 殺虫剤をかける。
- ③ 熱湯をかける。
- ④ 洗剤をかける。
- ⑤ 人を呼ぶ。
- ⑥ 大声で叫ぶが何もしない。
- ⑦ 見ないふりをする。
- ⑧ 無視する。
- ⑨ 戸外に出す。
- ⑩ 逃げる。
- ⑪ 捕まえて飼育する。
- ⑫ 観察する。
- ⑬ その他（自由に記してください。）

これは、いやなこと、いやな人に遭ったときの自分の行動パターンだといえる。

それぞれの意味はおおむね次のように考えることができる。

- ① 新聞紙を丸めて叩き潰す。＝直接対決する。人間的。
- ② 殺虫剤をかける。＝科学的に確実に殲滅する。やや冷たい。
- ③ 熱湯をかける。＝情熱的。感情的。

- ④ 洗剤をかける。＝やや責任回避。命を奪うという結果に対する罪悪感。
- ⑤ 人を呼ぶ。＝他人まかせ。無責任。
- ⑥ 大声で叫ぶが何もしない。＝一瞬反応するが、あとは責任回避。
- ⑦ 見ないふりをする。＝気になってはいるが行動しない。
- ⑧ 無視する。＝意識から無理に排除する。
- ⑨ 戸外に出す。＝相手に対する愛情はあるが、近くにいてほしくない。
- ⑩ 逃げる。＝とにかく問題を避ける。
- ⑪ 捕まえて飼育する。＝相手に愛情を持ち、害の無いありかたを工夫する。
- ⑫ 観察する＝科学、愛情を含めて、冷静に対処法を考える。
- ⑬ その他（自由に記してください。）＝（象徴的にそれぞれを考えること。）

このように、危機管理といってもその背景が深く、さまざまなトレーニングが必要だといえる。小論はその一端でしかないが、適宜有効に活用していただけることを期待する。

なお、小論は、2011年4月3日、東京大学医学部で行われる医療安全教育セミナー2011春季「リスク感受力向上の技術実習」（国際予防医学リスクマネジメント連盟主催）の筆者講演のための準備を兼ねて執筆した。

[Sensibility Exercises for Evasion from Medical Trouble]

[ARAKI, Masami・地域健康文化学会会長・九州大学大学院医療経営管理学専攻非常勤講師]